断章 旭川のアイヌ語地名研究 ㉑

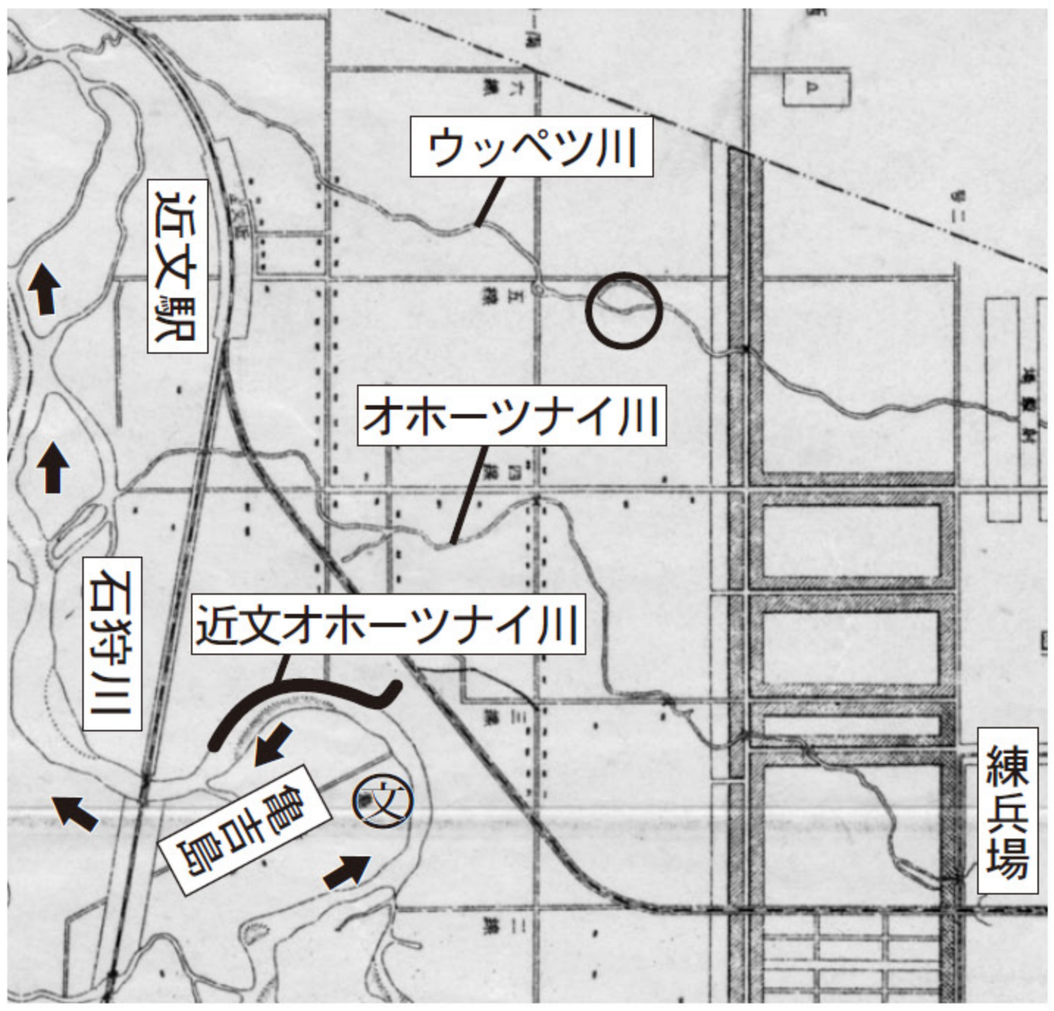
高橋 基

―オホーツナイ川―

この川名が地図上に最初に描かれたのは、管見では前々回に図示した明治三十一年製版の「北海道仮製五万分一図」で、「オオホウッーナイ」と書かれている。今回掲載の地図は、「大正五年旭川市街図」で、これに現在の川名等を記入したもの。近文オホーツナイ川は、ご覧のように、本来は、石狩川の旧流跡部分で、昔はなかった川名。㊇印は現在の旭川西高で、往時の亀吉島（かめきち）の北東端にあたる。

この地図では、オホーツナイ川は、当時の第七師団の練兵場を水源として、図のような流れであったが、現在は上流部を近文オホーツナイ川の普通河川として切り替えている。

ところが、明治二十四年に測設された、「石狩国上川郡鷹栖村区画図」は、湿原を流れて来て直接本川（註・石狩川）に入らずに他の川（註・ウッペツ川）の横腹に肋骨（ろっこつ）がくっつくかのように横から注いでいるもの。よく横川、脇川などと訳される。」



知里地名解に協力したのは、門野ナンケアイヌエカシ、石山アツムヤシクエカシ、そして、荒井源次郎エカシである。ウツナイの訳に、「やち川」が当てられたのは、三人のエカシの共通の認識が込められたものと思われる。

前回紹介した、山田秀三の川村カ子（ネ）トエカシからの聞き書きを再度記載したい。

①ウッペッに付き―このウツは肋骨のウッではない。「鉄分を含んで濁っている」のをウッという。

②オホウツナイ―このウッはぐるぐる廻っている川の意味である。

前回も書いたが、これは、「ウッ（ut）」の語意よりも、現実の川への実感がこの表現になったものと推察できる。

明治二十一年に札幌で生まれ、明治二十六年に、「近文原野オオフツナイ（現・大町二条八丁目付近）」に移住した旭川の郷土史家のリーダーだった斎藤譲三氏は、「オオフツナイ（崖を曲流する川）は、むかし石狩川の支流といわれている。水源もとまり、いまは水も流れていないが、その跡は大町近文神社横に川水に洗れたわずかな崖岸は、東西にわたって見られ、今は廃川となり跡地の湿地をなしていた」と記述している。

また、「ウッペッ（瀬の川）左右の山ろくにかけ湿地が多く、大木の密林であって、南に近く水質は鉄分を含んで赤く、マンガン鉱石が見られる」（「郷土のむかし」）と、川村カ子（ネ）トエカシの見解の裏付けをなしている。

なお、『旭川アイヌ語辞典』に、「ウッ（ut）―名詞―川の淀み―（比布、尾沢カンシャトク）」と採録されており、「比布ウッペッ川」もあるので、今後のウッペッ―ウッナイ研究の検討資料とさせていただく。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します